

## ただいま好評放送中！ ～市民による市民のための情報発信～



放送局ときくとどんなイメージを抱くでしょうか。東京などの大都市にあるいわゆるキー局といわれている放送局は、都会の一等地にどーんと社屋を構え周辺にもぎやかな街で流行の最先端を行く都市のランドマークとなっています。

今回ご紹介するのはそうした大放送局とは一線を画す規模の小さな放送局。手作り感たっぷりの放送局です。

パソコンやデジタルカメラのような機器の進化と価格の低下、大量の情報を送れる通信技術の進歩と普及、専門的な知識がなくても操作が易しく使い勝手の良くなったパソコンの各種ソフトなど近年のIT化は、情報の発信の従来

のあり方とか情報の「出し手と受け手の関係」も大きな変化をもたらしているようです。（もちろん、情報の活用のための行政側の規制緩和も大いに影響しています）

その一つとして市民放送局とか住民ディレクター、市民ディレクターとかいわれる「市民の市民による市民のための放送局」が増えています。少し前まではもっぱら情報の受け手であった市民が、情報を発信する側に立つことができる時代となっています。

### 調布市民放送局

調布市民放送局が制作した番組は地域のケーブルテレビ（J:COM）の地





番組の出来を最終チェック

域限定情報番組のなかで枠を提供してもらい毎日三回放送しています。毎月二回新しい内容に変わります。同じ番組をインターネットでも視聴することができます。

### まさに市民による 市民のための

調布市民放送局は今のところ法人でもNPO法人でもありません。いわば同好の士の集まりです。みんなが手弁当で参加し運営しています。会員は現在二〇名。

京王線国領駅前の「市民活動支援センター」の二階のサロンの一角。毎週火曜日の夕方六時。会員が集まり会議と検討会が開かれます。検討会は次回オンエア予定の番組の出来をチェック。番組は約六カ月前に企画決定後、作成担当が決まり二カ月前後をかけて番組を作成します。東京都調布市の

「人・モノ・こと」を主題にする地域密着情報番組。

月に一度調布市の施設内にあるスタジオを数時間借りて番組の導入部分を撮影し編集します。アナウンサーも当然会員がつとめます。

地域のイベント情報（行事）や出来事、あるいは季節の変化とともに感じる身近な自然などを五分間の番組に仕上げます。調布市民放送局の代表の大野さんと副代表の長友さん。

「五分間といえど大変」「五分間ゆえに難しい」。それにケーブルテレビに番組を提供する以上、万が一にも穴を空けるわけにはいきません。「プレッシャーも結構あります」

大野さんも長友さんも「本業」は主婦。一家の主婦や会社員や画家や職業身分立ちはさまざまな会員ですが、なぜ番組づくりをはじめることになったのでしょうか。



導入部分の撮影

そもそもは五年前、調布市の「地域情報化基本計画」。市民の手による地域情報化を考えようと集まった人たち。せっかく集まったのだから地域の情報に關しての活動をしようと、調布FMの協力も得て「みんなdeネット」という地域情報のラジオ番組の企画制作をはじめました。

やがて「音声だけでなくも画像があった方がいいね」と他に二つのNPOや市民グループも結集し、大学の先生のアドバイスも得て平成一七年三月放送局の準備会、同年八月正式に放送局がスタートしました。番組放送は翌平成一八年八月から開始しました。

### 手作り番組

調布市民放送局は自前のスタジオはありません。スタジオどころか局の登録所在地は代表の大野さんの自宅です。会議や打ち合わせは市の施設の会議室



代表の大野さん、副代表の長友さん



副代表の横山さん



大野さん自慢の最新パソコン

を借ります。スタートのときに寄付であつまった数十万円で購入したビデオカメラ、マイク、パソコン、番組保存用のハードディスクぐらいが自前の番組制作機材です。(したがって自前の機器を使つての作成も結構多い由)

ビデオカメラで撮影した画像はパソコンに取り込んでから編集加工します。

「スタジオはパソコンの中です」

「さいわいにして私はパソコンの操作が好きなものですから」まさに手作り。

「いまやパソコンは主婦の必須アイテム」だそうです。

(自らが番組を作る側になって)「全くテレビを見る視点が変わりました」大野さん。

「スタートのときの寄付は助かりました。期待もされているなど思いました」副代表の長友さん。

もう一人の副代表、横山さん。現役時代の仕事は外資系のコンピュータ会

社勤務。調布在住三〇年。現役引退後ある市民活動に参加。既述の市民グループが放送局を立ち上げると聞いてご自分も加わりました。

「全くの素人ですからねえ、はじめは何からやればいいのか全く分からなかった」大学の先生の指導もあり何とか番組を作れるようになってきました。

「いまは使いやすい番組編集用のパソコンソフトもあるしね」現役時代はコンピュータのプロ。パソコンを使うことにはそれほど抵抗はありませんでしたが、映像編集は初めてでした。

「市民放送局の活動に参加されて何か変化は？」

「間違いなく知り合いが増えます」

「番組をつくるということで行けばとても行けないところへも行けます」

「たとえば？」

「先日は女子大で取材もしました。」

横山さんは他にも市民グループに参加されています。「おかげで結構毎日忙しいです」

### 手作り放送局

調布市民放送局は現在、資金や設備やスタッフが十分だとは残念ながら言えません。でも他人に伝えたい、情報を提供して考えてもらいたい、ささやかな事でもいいから共感をしてもらいたい、そんな情報を発信する「思い」があれば資金や機材が十分でなくとも番組は作れるのだと思います。大野さんをはじめ調布市民放送局の会員皆さんは、各人が自分たちのできることをさらりと自然体で進めているようです。決して背伸びせず急がず。

「放送局というのは少しおこがましか



この日集まった会員の皆さん



ったのですが」

確かに調布市民放送局は放送局というよりは番組制作集団（法人ではないので）と言う方が正確かもしれません。でも放送局とした方が将来に期待を持てますし楽しみがあります。人が集まって来るような感じがあります。

「調布の良さと情報をもっともっと発信したい」大野さん。最後に、

「でもやっぱり自前の気楽に集まれる事務所などはほしいですよ。その実現に向けてがんばります」

◎問合せ先

調布市民放送局：

〇四二（四八九）四三八四

<http://www.chofu-catch.tv/>

e-mail : [catch@chofu-catch.tv](mailto:catch@chofu-catch.tv).

## F M 桐生

群馬県桐生市の市街地。ビルの三階。

F M 桐生の放送局があります。ガラスのドアを開けると応接兼事務室がありその奥がスタジオになっています。スタジオは大きなガラス窓があつて中の様子がよく分かります。桐生 F M の塩崎さんに取材のため伺ったときは四月上旬木曜日の昼下がり、トーク番組のオンエア中でした。司会進行は女性 D J 。音声は事務室にもモニターで流れています。午後のひと時を地域の話題や軽



いおしゃべりそして音楽というリラックした番組のようです。

## 地域密着 F M 局

塩崎さんにお話しを伺っている隣のテーブルには、番組の次のコーナーに出演するゲストが待っています。

「どんな話しをされるのですか」「わたしうどん屋なんです。いまごろ町中のうどん屋がこのラジオを聴いていますよ」（桐生のうどんは美味しいですよ。うどん屋さんも多いです」と塩崎さん）



奥がスタジオ（写真上）  
塩崎さん（写真下）

F M 桐生はコミュニティ F M と呼ばれるラジオ放送です。電波の出力規模では半径約一〇キロ程度が聴取可能エリアで、面積にもよりますがだいたい一つの市の市街地をカバーします。一般の F M 局よりも電波の届く範囲は狭いものの、もつと地域限定（半径数百 m）で無線免許の要らないミニ F M 局とは全く別です。

F M 桐生の聴取可能人口は一万から二万。当然地域密着ですから放送の反応は早くかつストレートだそうです。

取材中も入れ替わり立ち替わり番組のゲストが待機しています。うどん屋さんの次に来たゲストは三〇歳前後。「レストランをやっています」シェフです。うどん屋さんもレストランのシェフもあんまり緊張しているようにも見

副調整室



えず、でも手には番組でしゃべる予定のメモを準備しています。(意気込みが分かります)

運営をされている塩崎さんは、実は地元で二代続く歯医者さん。昭和二十七年生まれ。

気さくでかつ行動的とお見受けしました。失礼ながら中年には見えない精悍な体つきでもあります。

F M 桐生の開局は平成一九年七月。開局後ようやく「ペースが分かっただところ」です

「マネジメントは軌道にのってきまして、やはり事業ですから営業でキツイ面もありますよ」

放送局の中は、事務室とスタジオ、スタジオの隣がサブと呼ばれる副調整室。準備の部屋や会議室、スタッフ休憩室とあります。スタッフは四、五人。FM局となると放送設備だけで初期費用は、「ふつう一億円はかかる」。放送局のプロやデジタル機器に詳しい知人の協力で「数千円で行った」

「ここまでデジタル化を徹底している局は少ないですよ」「音楽もレコードやCDは一枚ありません。全部iTunesです。楽曲は全部iTunesから取り込んでいます」「レコードやCDの購入資金も掛かりませんし、保管するスペースもありません」

FM桐生の運営は、塩崎さんが理事長をつとめるNPO法人「桐生地域情報ネットワーク(KAIN)」が主体となつてなされています。塩崎さんが、NPO法人のFM局を担うに至る経緯は次の通り。

### 桐生の地場産業「桐生お召し」

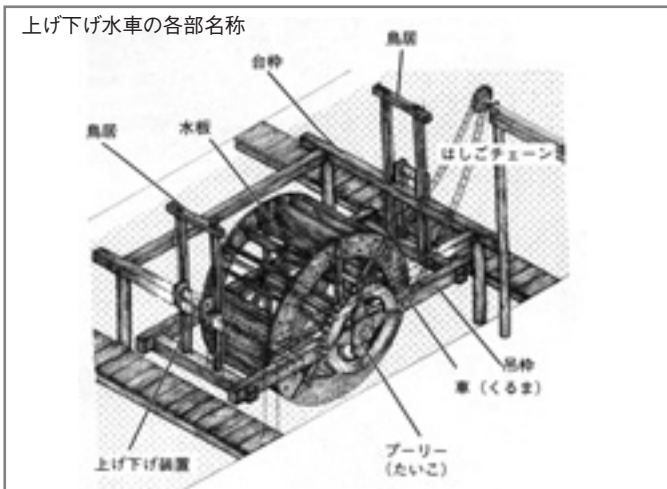
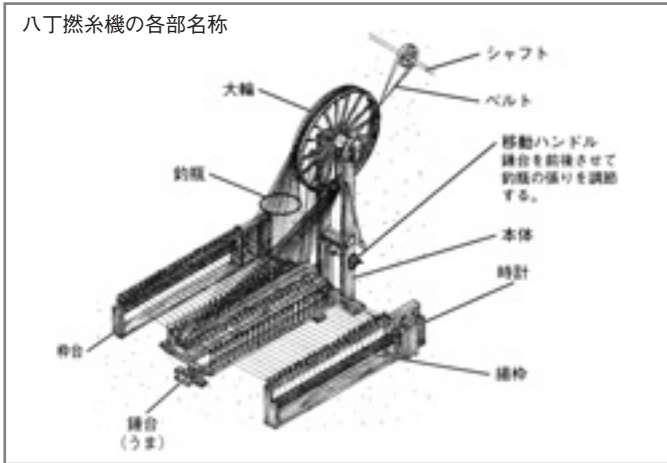
桐生の地場産業は高級絹縮緬(ちりめん)「桐生お召し」といわれる織物産業。この織物があるため江戸時代の初期は幕府の直轄地。江戸から明治大正を経て、昭和三〇年代ころまで、織都桐生は経済力も技術も文化もある、遠くに赤城山を望む活気ある小都市でした。

独特の肌触りの縮緬は、糸に強い撚りをかけてから織ります。その強い撚りをかける機械「八丁撚糸機」とその動力源の水車(水流にあわせて水車が上下する構造になっていた)が江戸時代後期に発明されてから生産量は大いに伸びたそうです。

塩崎さんは、これまでも得意のコンピュータ技術を活かして仲間とパソコン通信やインターネットのホームページ作りなどを通じた街づくりネットワーク活動をしていました。その活動をベースにしてNPO法人「桐生地域情報ネットワーク(KAIN)」を設立します。そこで地場産業を支えた八丁撚糸機や上げ下げ水車が桐生で発明されたことを知ります。かつての隆盛はありませんが「桐生お召し」もそれをささえる職人もがんばっていることも知ります。地元の技術や文化を次の世代に残したい。残すことが桐生の活性化につながるのではと「何とかしなくては」と焦る気持ちもあつたそうです。

### NPO活動の「環」

「情報化を通してまちづくり人づくりのお手伝い」がKAINの活動の目的です。桐生市老人クラブ連合会や群馬大学工学部学生に呼びかけて桐生お召しや八丁撚糸機をテーマに二冊の本を出版(二〇〇三年、二〇〇四年)。職



出典：「桐生織物と燃糸用水車の記憶」桐生市老人クラブ連合会、NPO法人桐生地域情報ネットワーク発行・編集

人が語る講演会をシリーズとして一回開催。すべて書籍、DVD、ホームページに記録として残しました。この一連の活動を通じていろいろな人を知ることになりネットワークも形成されてきました。

某日、桐生ガスの社長からFM放送の運営の話が持ち込まれます。「資金は地元の企業や金融機関が出す。放送局の運営（企画制作、管理、営業など）は塩崎さん（とNPO）に任せる」というものです。

桐生の技術や文化を記録し残すことで桐生の活性化に活かしたい。書籍もDVDもホームページも情報を伝達す

る媒体である。ラジオも媒体の一つだ。それも仕事中でも車の運転しながらでも聴くことができる身近な媒体ではないかという決意のもと、FM桐生の運営を引き受けることになったというわけです。

「ラジオならお年寄りでも子供でも聴けますよね。インターネットはまだ必ずしも誰もが使えるようにはなっていないです」

番組表をみると地元の情報、民話、大学の先生の講座などあつて結構バラエティに富んでいます。

「知り合いがラジオに出れば、みんな聴きますよね。聴く人が多ければ情報

も集まってくるものです」

今後の抱負をお聞きしました。「桐生の産業とうどんと自然。桐生の魅力をラジオを通して売り込みたい」

◎問合せ先

FM桐生：〇二七七（二二）三三三九

e-mail：info@kiryu.fm

\* \* \*

素人集団（失礼！）が、思いをひとつにして番組をつくりケーブルテレビを通じて発信する。まちの歴史や文化を情報として残すために始めた活動の延長上にラジオ局を運営する。

普通の市民が不特定多数の人々に情報を発信するなんて少し前なら考えられなかったことが、IT技術の進歩によって実現しています。今後どういう風に展開されていくかも楽しみです。情報を発信する側にたてば改めて自分の身の回りを見つめなおすことになりました。地域と密接に関係することになります。市民からの情報発信は地域社会への関わりの新しい形といえそうです。

取材



小針 良二  
地方公務員等ライフプラン協会